

序

研修医の頃は、とにかく手技が上手くなるように、先輩をお願いしてコツを教わったり、仲間同士で練習したりしました。目をつぶってもイメージ、説明できるようになるまで、数多くトレーニングしたように思います。古典的な伝統芸能では技を学ぶ段階を守・破・離と言うそうです。

守：形を模倣しくり返すことによって教えを忠実にまねて自分のものにする。

破：形だけ似ていても技が上達しないことに気づき、教えを自分なりに深めて発展させる。

離：状況全体の意味を考えながら、教えを活かして自由に振る舞う。

解剖生理等のベースとなる知識と基本的な作法をまねて身に付けていれば（守）、それぞれの手技はそんなに難しくはありません。これらの知識が立体的となり、合併症としてどんなことがいつ、どのように起こるか、そのためには何をどう確認してどう対処すればよいか、までを知っていれば、鬼に金棒です。さらに、画像や手術の所見をその都度まめに確認して、そのときのイメージを手取るように生き活きと表現できれば、さらにかっこよく自信にあふれた達人になれるでしょう。この本は、いち早く、センスが磨かれて達人になる、つまり破の段階（型破り）に達するためのエッセンスを、それぞれの領域の専門家をお願いしてまとめました。

まず最初に、考え方、知識のポイントを整理しました。そして手技の実際をタスクトレーニングのためのシミュレーターを多用して、よりリアルに解説していただきました。ERでの手技はもちろんですが、集中治療に引き続く内容も含めた、非常に盛りたくさんの内容を網羅することができました。

そういった意味で、この本は単なる手技だけでなく、手技にかかわる重要な考え方を伝えることができたと思います。今まで私が考えてきたこと、経験してきたことを、すべて反映させることができました。この一冊によって、みなさんの手技やその理解に重みが増し、その結果、多くのプロの救急医が育つことを願っています。

2012年12月

太田祥一